淡河城と羽柴秀吉制札

中世の淡河と淡河城

交通の要衝、淡河

淡河は湯山街道（有馬街道）の宿場町で、江戸時代には本陣（大名などが宿泊する施設）が置かれていました。摂津国内で山陽道から分かれ、有馬（現神戸市北区）、三木（現三木市）などを経て、姫路（現姫路市）に至る湯山街道が東西に通り、南北には兵庫（現神戸市兵庫区）から山田（現神戸市北区）を経て吉川（現吉川町）に至る道が、江戸時代の淡河町付近で湯山街道と交差しており、淡河は中世以来、交通の要衝に位置していました。

▲淡河城縄張図（宮田逸民氏作図）

朽木史郎・橋川真一編『ひょうごの城紀行』上（神戸新聞総合出版センター）より

淡河氏と三木合戦

中世の淡河には、淡河氏と名乗る在地領主がいました。淡河氏の存在は鎌倉時代から確認できます。南北朝時代には南朝方としての活動が見られます。戦国期には播磨守護赤松氏の一族である別所氏に属していたものと思われます。

三木城を本拠地とする別所氏は、織田信長が足利義昭を擁して入京して以降、織田方に属していましたが、天正６年（1578）に織田方に反旗を翻したため、信長の部将で、中国攻めに携わっていた羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）によって攻められます。これがいわゆる三木合戦です。このとき、淡河城主の淡河定範も別所方に属します。織田方は淡河城を包囲する付城を築いて淡河城を攻め、天正７年（1579）５月末には、淡河城は開城しました。淡河定範は三木城に逃れたとも言われています。その後、淡河城には有馬則頼が入りました。有馬氏は江戸時代、久留米藩（福岡県久留米市）の藩主となっていますが、その家臣には淡河氏の一族も見られます。

▲淡河城跡
道の駅の裏手から淡河城跡を望むことができます

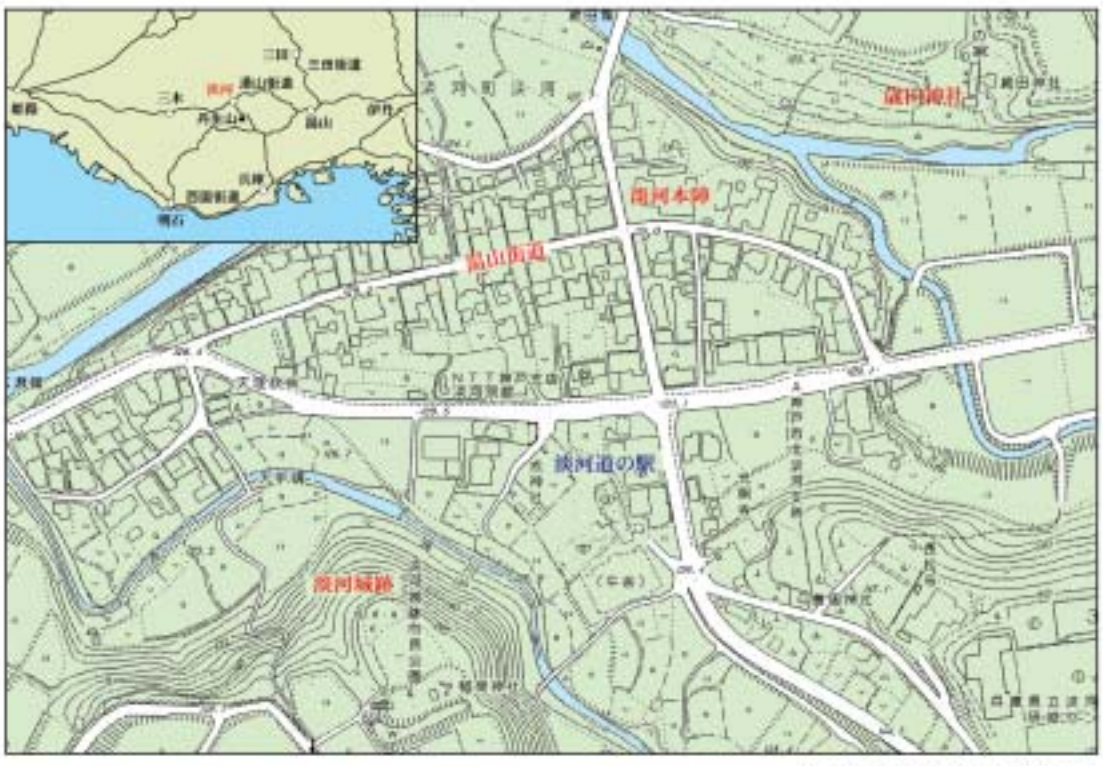
淡河城（上山城）

淡河城は、淡河川の河岸段丘の突端部に築かれており、上山城とも呼ばれます。暦応２年（1339）、南朝方の淡河城が、北朝方の赤松則祐らによって攻められています。これが現在も城跡が残る上山城と同じものかどうかは不明ですが、戦国期までには淡河氏は上山に城を築いていたものと考えられます。

淡河城は現在ではその全体像は不明ですが、本丸部分には堀跡などが残り、形をとどめています。堀は規模が大きく、淡河氏の後に、淡河城に入城した有馬氏の手による改修の可能性もあります。城内の竹慶寺跡には石塔があり、淡河氏の墓所と伝えます。

▲羽柴秀吉制札が保管されていた歳田神社

▲竹慶寺跡



神戸市教育委員会提供の地図を加工

発行　神戸大学文学部地域連携センター
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
Tel/Fax　078-803-5566
e-mail　area-c@lit.kobe-u.ac.jp

このポスターは、淡河町自治協議会と神戸市、神戸大学文学部地域連携センターの連携事業で作成されたものです。